

Scramble Shot

●
Opera ハンブルク州立歌劇場が
《マタイ受難曲》を視覚化

ドイツのハンブルクでは、現代アートで名の知られているダイヒトールホーツとのコラボレーションで、バッハ《マタイ受難曲》をイタリア人先鋭演出家ロメオ・カステッルッチが視覚化した《ラ・パッシオーネ》が4月21、23、24日と続けて上演された。

仮設客席から見下ろすと、白い床と白いカーテンの空間に、白い衣裳の楽団員が見える。底に白いスーツ姿のケント・ナガノが聖水を携えている二人と共に登場する。手を清めてから指揮台に上がって厳かに受難の幕が開けた。

ゲネラル・ブローベ（最終リハーサル）では、全体的にバッハのアーティキュレーションに欠け、テンポも走りがちだったが、本番はジョルジュ・デルノン総裁のアドバイスもあって、見違えるように統率されていた。

この上演は最近流行っている演出付きではなく、それぞれの曲に、イメージとなる現代版受難エピソードが視覚化される。羊の人形から血が吹き出て聖杯に溜まるなどグロテスクなもの、横倒し状態の本物のバスを登場させ、技術班泣かせだった曲、観客の想像力をかき立てるもの、実際に両脚を失った男性が義足を付け替えたり、妹の死から修道女になった老女が、祈る人型のケースに入れられるシーンなど個人的受難もある。「時代と宗教を超えた受難物語として現代人に捧げる」この《ラ・パッシオーネ》は、特に現代アートのファンから共感を得て、予想に反して大きな拍手を受けていた。

福音史家のイアン・ボストリッジは声の破綻も気にせず、取り憑かれたように激しく歌ってヒヤヒヤさせられたが、その他の歌手陣は手堅く好演していた。

（中 東生）

